

リンド像再構成の基本的文脈

後 藤 隆

一 はじめに

近年注目されるようになった社会調査史的な接近から見れば、一般に従来の社会調査作品の理解には、作者の意図やモチーフを掘り起こす視点が弱いという。調査技法や作品の沿革を紹介するほどのことはあっても、なぜその技法が必然であり、作者はどのような研究上の企図をもってある調査対象を選ぶにいたったか等、ひとつひとつの作品に内在した分析、再構成が不十分だ、との指摘である。

本稿がとりあげるアメリカの社会調査家、R・S・リンドに関するこれまでの言及を見ても、以上の批判は概ね妥当するようである。二つのミドルタウン研究を著した彼は、コミュニティ調査の「先駆」と評され、特にその参与観察法は現在迄多くの社会調査テキストで「代表例」のあつかいをうけている⁽³⁾。しかし、人々の生活と意識を注視する彼の「密着度」がどれほど賞賛されても、リンドがなぜにそうまでリアリティにこだわり、それを知ることでも何を明らかにしたかったのかは依然不明なままだろう。

「……こうした諸現象をある特定の状況におけるそれらの相互関係の形で提示することによって、旧来の諸問題に新鮮な光りがあたり、さらなる洞察が生まれるだろう……」⁽⁴⁾」

参与観察データを用いて「光り」を投じたかった「問題」とは何だろうか。そしてそもそもそれはリンドのどのような思考過程の中で設定されたのだろうか。このことを明らかにするための基礎データと分析視角の概略についてまず述べることにしよう。

第一に、リンドの関心やモチーフをできるだけストレートに示す資料が必要になってくる。「ストレートに」と言わなければならないのは、ミドルタウン

研究がそうなのだが、彼の叙述はしばしば膨大な事実の集積であり、それをとらえるにいたった視点の形成過程、学問的影響関係などについてはインプリシットな場合が多いからである。

'70年のリンド没後アメリカで始められた『リンド・ペーパーズ』の分析は、こうした資料面での大きな前進となった。それは、彼の雑誌論文、手稿など広範な内容をカバーし、従来曖昧にされてきたリンドの諸研究の脈絡をかなり細かく跡づけることを可能にしている。時期区分風にまとめるならば、次の六つの研究活動がある⁽⁵⁾という。

- (I) キリスト教伝道師としての布教活動期（'20～'23）
- (II) 『ミドルタウン——現代アメリカ文化研究』（'29）
- (III) フーヴァー大統領委員会の『最近の社会動向』研究と、ニュー・ディール政策の消費者局に関わった、消費者問題研究期（'30～'36）
- (IV) 『変遷するミドルタウン——文化コンフリクト研究』（'37）
- (V) 『何のための知識か——アメリカ文化における社会科学の位置』（'39）
- (VI) 社会計画論を中心にデモクラシー論、権力論への関心を強めた'40年代以降

重要なのは、(I)～(VI)の重層性が明らかになりつつことである。すなわち、布教活動期に得た関心が『ミドルタウン』のモチーフとなり、それに消費者問題研究期の「制度学派」理論の摂取が重なって『変遷するミドルタウン』の「文化コンフリクト」論が着想され、その上に(V)、(VI)の展開がある。しかも、(I)、(III)期は、実践的に解決すべき問題に直面していた分だけ、リンドがより直截に独自の視点を打ち出している。言わばこの両時期は、二つのミドルタウン研究の揺籃期であり、同時に彼の関心に接近しやすい、リンド理解にとってキーとなるデータを提供してくれるだろう。

第二に、(I)～(VI)を通観できる分析視点を得るために当面何を抛り所にすべきだろうか。言わゆる主要三著作（二つのミドルタウン研究と『何のための知識か』）を既存の諸分野の関心から切り取った、リンドに関するいくつかのトピック——参与観察法、コミュニティの階層と権力、アメリカ社会学批判⁽⁶⁾など——は拡散的であり、又例えば参与観察法について先にふれたように、リンド独自の含意に忠実かどうかとも疑問が残る。それよりも、主要三著作の副題に注意したい。それらに一貫して用いられている「文化」の語はリンドを通底

するモチーフを読み解く契機とはならないだろうか。

ミドルタウン研究後のリンドはアメリカ文化のつくりかえを模索していた。「文化を能動的に担い、伝え続け、動かす人間」の復活が彼の目標だった。『何のための知識』かに始まり、実証主義的な分析モデルの洗練化の代表作『アメリカ兵士』研究を『非人間的』と評するにいたった社会学批判も、ソヴィエトをモデルに合理的な計画経済、すなわちニュー・ディールの徹底を呼びかけたもの、基本的にはこの目標からの発想である。'29年恐慌という「アメリカン・ドリーム」の完全な崩壊を経験したにもかかわらず、社会学者は現実から「実験室」へ退き、人々は再び同じ「繁栄の夢」を追おうとしている。プラグマティズムの「問題解決」志向はなんら実現しないのではないか。リンドの強烈な時代への問題提起である。

彼のこうした文化批判の姿勢が実は二つのミドルタウン研究での文化分析を基礎にしているとの解釈がある。ひとつはA・シュッツの「日常的思考」論である。「自明な日常生活に懐疑を投げかける参与観察者」であったシュッツは、「検討を要する事がらを自明の事がらに置き換える」、「日常的思考」の典例として、リンドが『変遷するミドルタウン』で描いた「ミドルタウン精神」を挙げている。⁽¹¹⁾ 又、フランクフルト学派は『ミドルタウン』を次のように評している。

「彼等（リンド夫妻）の著書はその記述が客観的でありながら、1920年代を特徴づけているアメリカ社会を自己批判することにあつた。当時の文献では、アメリカの田舎を発見すること、とくに田舎の生活の画一性という観点から、それを発見することが決定的な役割を演じていた」⁽¹²⁾（傍点後藤）。

シュッツにしてもフランクフルト学派にしても各々の立場からの注目であり、うのみにすることは勿論できないが、特にミドルタウン研究後のリンドの関心を考えた時、彼の業績を脈絡づけるための有力な視角と確認してよいだろう。それにしても、「日常的思考」、「画一性」と特徴づけられるリンドの「文化」概念とは、一体どのような内容なのだろうか。この問いをガイド・ラインとしながら、先の布教活動期の分析から始めることにしよう。

二 習慣的な「意味」とその保守性

第一次大戦従軍後それまで成功していた実業を捨て、リンドは伝道師に転じ

ようとした。生活上のこの大きな転機を明解に説明できる資料は少ないが、彼がキリスト教の社会的実践に関心を持っていたことは確かである。長男R・リンドの回想によれば、父リンドは当時、シカゴの腐敗を厳しくみつめたC・サンドバーグの詩や、利益優先の「ビジネスの論理」を批判したT・ヴェブレン⁽¹³⁾の作品を好んで読んでいたという。又、リンドが属したプレスビテリアン派は、急激に進行する産業化、都市化に伴い社会的活動を強めるキリスト教各派の中であって、「教会と<労働者>部」を作るなど、リベラル派の最先端に位置していた。以上の、言わば状況証拠に加え、次の発言が彼の完教活動の社会的性格を示している。

「……私の関心は、私自身の人間性にしたがって、人々が激しいビジネス中心文化の中で自分自身の価値を考えぬくよう援助するという問題に携わることにある⁽¹⁵⁾」。

リンドは志願して油田労働者キャンプに伝道に行き、この関心を実践しようとした。過酷な労働に「自分自身の価値」を忘れている人々を説教と対話で祈りと内省に向かわせたかったのである。しかし、さまざまな努力にもかかわらず、人々の反応は冷淡なものだった。彼は自らの活動のあり方を再検討しなければならなくなった。

まず神学校で習得した種々の儀礼が問題である。休日すらない労働条件の中で疲労しきった労働者達をどうして日曜学校に集めることができるだろうか。又、彼らの日常生活とかけ離れた世界である聖書の文言を繰り返すことにどれほどの意義があるのか。リンドはこう問い、「自分の地位を正当化するため」の「ドグマ」⁽¹⁶⁾の伝道を断念する。

そして、儀礼や教義にとらわれない目を見た時、リンドは人々が生活の時々に示すプリミティブな祈りの瞬間に注目するようになった。悲しみや困難に出あった人々のごく自然な内省——「潜在的な宗教」⁽¹⁷⁾——こそ、「自分自身の価値」を問い直す契機になる、と考えたのである。リンドの社会学的モチーフの萌芽はこの「潜在的な宗教」の理論化から生まれてくる。以下それを見ていこう。

J・デューイの習慣論がここでの基礎理論の役割りを果たした。自然的社会的諸環境への「適応」を円滑にするために社会的学習を通じて獲得された「素質」である「習慣」はしばしば硬直化、惰性化する。デューイはこの「悪しき習慣」を改善する二つの道すじを考えていた。ひとつは、仮説—実験—検証の

過程を経、客観的な現実把握をめざす「探究」、もうひとつは「習慣」が動揺させられるような何らかの問題状況を「特別な道徳的瞬間」ととらえ、惰性を打ち破る積極的な契機として位置づけていくやり方である。⁽¹⁸⁾

リンドはこの後者を援用する。確かに人々は日々の生活を暮らしていくために、労働の苦痛に耐える沈黙の姿勢を、あるいはビジネスを拡大する利益追求を、堅固な習慣的な「意味」としてしまっているのかもしれない。しかし、通常は崩れることのないこうした「意味」も、それに対抗するような諸価値——例えば愛情や友情など——、さらには生活や人間関係の危機的な破綻などに直面すると、疑問や不信が向けられる。そして、このようにしてひとたび習慣的な「意味」への全面的依拠が動揺すると、人々はその際生じる不安定な「感情」を祈りに込め、やがてはそうした問題状況をも合理的に説明しうる、新しいより包括的な「意味」を構築していくだろう。⁽¹⁹⁾

つまり、リンドは習慣的な「意味」のコンフリクト状況を契機に人々がそうした「意味」をつくりかえていくプロセスに注目し始めたのである。そこにはまだ「祈り」など宗教色を残しているとはいえ、基本的には「キリスト教から社会学へ」のリンド的離脱があった、と見てよいだろう。事実、『ミドルタウン』での彼の焦点は、文化遅滞論を軸にこのプロセスの現実を分析することに絞られていく。はたして人々は新しい「意味」を獲得するのだろうか。『ミドルタウン』の考察に入ることにしよう。

『ミドルタウン』の冒頭で参与観察法が採られた理由が次のように述べられている。

「多くの日常会話をここで用いたのは……、町のムードや思考習慣を洞察するために不可欠だったからである」⁽²⁰⁾ (傍点後藤)。

布教活動期に得た、習慣的な「意味」のモチーフと重ね合わせれば、ここでの彼の意図は明白だろう。つまり、「意味」コンフリクトがあらわれてくるような人々の生活と意識の微妙な変化——「ムードや思考習慣」——をとらえるための、それは技法だったのである。

ところで、そうは言っても、『ミドルタウン』の分析対象はコミュニティ全体である。伝道師時代のように一人一人との対話はありえない。コミュニティ内の多くの人々に共通する動向というレベルで、「意味」コンフリクトが生じる社会的メカニズムを設定しなければならない。リンドはこのためにW・F・オグ

(21)
 バーンの文化遅滞論を導入した。周知のようにこれは、物質的文化が非物質的文化に先行する結果起こる不整合現象を指摘する説である。リンドは前者の主要な変数に19世紀末以来のミドルタウンの産業化の進展を、後者のそれに習慣的な「意味」をあてはめた。つまり、『ミドルタウン』で彼が見た「意味」コンフリクトは、産業化によって生じた諸変化を習慣的な「意味」がとらえきれない時のそれを指している。

『ミドルタウン』の定評ある現実描写はこのコンフリクトの記述にほかならない。リンドは文化人類学から借りた六つの生活領域の区分——生計、家庭、教育、余暇、宗教、コミュニティ活動——各々に、こうした産業化に伴う「意味」コンフリクトを発見している。例えば、労働形態の変化によるそれは次のようである。産業革命以前は、徒弟制度的な労働の熟練過程が支配的だった。その中で育った人々にとっては熟練度が労働者を評価する習慣的な「意味」である。ところが、機械化の促進は低賃金で作業スピードの高い若年労働者を求め、熟練労働者を排斥する。現実と「意味」はコンフリクトを起こし、当惑が語られる。

「私達は何をすればいいんでしょう？ さあ、それが私にはさっぱりわかりません⁽²²⁾」。

リンドはミドルタウンの人々のこうした問題状況を次のようにまとめている。

「市民は片足を確立された制度的な諸習慣という比較的堅い地面の上にのせ、もう一方の足を、とまどってしまうほどさまざまな速度であちこちの方向に移動するエスカレーターに、しっかりと踏み入れている」。

では、人々は、リンドが布教活動期に得たモチーフどおり、何らかの新しい「意味」構築へと向かうのだろうか。リンドの結論は否定的である。

「(新しい状況への対応という)『問題』が緊急のものとなり、コミュニティの人々が『処方箋』を探し、その実行を余儀なくされる時、この処方箋は、新しい状況への旧来のカテゴリーの論理的拡張、伝統的な語彙や他のシンボルに改めて固執することによるひと昔前の状況の感情的防衛、そして現今の制度的装置のより厳密な実行又はそのさらなる精緻化、となりがちである」。

(24)
 言いかえれば、習慣的な「意味」はコンフリクトゆえにつくりかえられるのではなく、そのままあるいは強化された形で保守化するのである。熟練労働者はますます自分の腕をたのみとし、ぜいたくなレジャーや拡大する消費は、プ

ロテスタンティズム流の「禁欲」的な「意味」とコンフリクトを起こした結果、当面は「禁欲」がより強調されていく。

人々はリンドのモチーフに反して新しい「意味」を求めないのだろうか。そして、もしそうだとすると、一度不信を感じた「意味」が維持され続けるのはどうしてなのか。こうした「意味」の保守性を解くために、リンドは習慣的な「意味」のメカニズムに注目するようになる。消費者問題研究期がその時期である。

三 習慣的な「意味」間の関係

従来のリンド研究ではほとんど無視されてきた消費者問題研究期について初めて整理したM・C・スミスは、ここでのリンドの主要な関心を次のようにまとめている。

「人間が個人として本当に価値をおき必要とするものは何か、そしてこうした『渴望』を現代資本主義社会がその制度的諸目的に奉仕させるためにどのように⁽²⁵⁾変容しているのか」。

リンドの以下の主張を見ればスミスの意見がそのまま妥当するかに思える。

「職の不安定さ、社会的不安、(労働の)単調、(人間関係の)孤独、その他の緊張状況に対する微妙な適応を代替してきた結果、大衆を相手とした商品販売事業は効果的で優れた技術に発展した」⁽²⁶⁾。

しかし、リンドの関心は「現代資本主義」の戦略にばかり向けられていたわけではない。どれほど優れた販売技術も人々に受け入れられることが必要であり、その意味であくまで人々の側にある「戦略」に共鳴するなにかを明らかにすることこそ急務である——リンドはこう考え、「制度学派」のW・C・ミッチェルの消費イメージ論を摂取しながら、次第に習慣的な「意味」論で消費行動をとらえていく。

ミッチェルはT・ヴェブレンの「誇示的消費」論を継承し、消費行動の説明につきまとう「合理性」をまず否定していた。消費者は性能などから合理的に判断した結果有用な商品を選択するのではない。商品選択を決定するのは、消費者が持つ漠然とした「よい暮らし」のイメージである⁽²⁷⁾。

リンドは、ミッチェルの言うこのイメージを探り、その底に伝統的な理想的価値があると分析した。すなわち、評判になっている広告や伸びの著しい商品

を調査してみると、そこには必ず好ましい習慣的な「意味」が含まれているという。例えば、必要以上の薬品を買うのは、「健康」という「意味」を手に入れるためであり、経済的には手の届かない家屋をなんとか購入しようとする「無計画な住宅熱」は、広告がアピールする「幸福」に少しでも近づこうとした結果だろう。リンドは言う。

「夫、妻、そして子供の消費は、驚くほど急増した生産物を、そこを通じて、アメリカの産業機構がなんとか流し込もうとする要衝であり、その結果提供されるのは『アメリカの標準』に沿った健康、財産、幸福である⁽²⁹⁾」。

又こうも言っている。

「私達は自分の消費を妥当とされている項目から成る、伝統という鎖に連結している⁽³⁰⁾」。

要するに、好ましいあるいは理想的な「意味」が消費の促進に貢献しているというわけだが、しかし、消費に関しては、これとは全く逆の、すなわち過度の消費を戒めるようなプロテスタンティズム流の「禁欲」的な「意味」も、守るべき「意味」とされてきたはずである。現に、『ミドルタウン』で見た時には両者はコンフリクトを生じていたではないか。

リンドはこの問いを通じて、習慣的な「意味」間のある特別な関係に気づく。同一の現象（消費）に関して対立的な「意味」——消費によって実現されると人々が考える「健康」等と、消費にブレーキをかける「禁欲」——がある場合には、その現象の肯定に結びつきやすいものがそれを捉える主要な「意味」となり、否定的な方は次第にかえりみられなくなっていく。

こうした彼の発想は、T・ヴェブレンの知識・信念論に強く影響されたものである。ヴェブレンはそこで、人々の行為の準拠枠であり、正当化の根拠である知識・信念・好み・公平観などの「原則」は生活の諸条件によって変化するが、それは旧来のものと全く違った形をとるように見えても、実はその内のどれかの「不使用」又は「置き換え」である、と述べている。

「新しい日常の知識や信念の諸項目は、伝統的見地と没交渉な（新しい生活条件の）新法則、新標準に容易に順応する力を持っている。それは不使用による退化とも言えるし、置き換えによる退化とも言える⁽³¹⁾」。

以上、リンドが見てきた、習慣的な「意味」から新しい「意味」（実は旧来のそれだが）へのプロセスとは、総じて次のようになるだろう。人々は社会的に

共有され、したがって日常的には自明としている習慣的な「意味」を持っている。生活上の変化などなんらかの問題状況が、現実と「意味」のコンフリクトを際立たせることがある。「意味」はその限りで確かに動揺し、疑問視されるが、同時にその現実をより肯定的に説明する別の「意味」が選びだされてくる。したがって、新しい「意味」とは皮肉にも現実肯定的な、習慣的な「意味」群のいずれかにほかならない。

リンドはこうした「意味」群のことを、「広く保持されている仮説や前提」=「当然の前提 (of-course assumption)」と呼び、今度はその支配力を問題にし始める。『変遷するミドルタウン』における、文化批判の開始である。

四 「ミドルタウン精神」の支配力

『変遷するミドルタウン』調査は「当然の前提」の徹底した収集である。リンドはそこでの参与観察の意義をこう述べている。

「町を歩きまわると……、たいへん慣れ親しまれ、もちろんのことだと普通思われているので、多くの人々にとって理解や合意の、知的なそして感情的な近道⁽³²⁾を意味する観点に出会う」。

彼は「当然の前提」には二種類あるという。人々がなにものかを「支持」する際の「前提」と、「拒否」する時のそれである。例えば'29年恐慌後の針路をめぐって、漸進的な社会改良は、ミドルタウンの「支持」の「前提」——例えば、進歩、楽観、レッセ・フェール等——とひびき合うために受けいれられやすい。逆に、ニュー・ディールのような急激な社会計画プランは、「拒否」の「前提」——ラディカリズムへの警戒、中央集権に対する嫌悪等——にふれるため、常に違和感がつきまとう。リンドはこの「支持」と「拒否」の「前提」の総体を「ミドルタウン精神」と呼び、次のように記している。

「その名の下でミドルタウンの人々が行為する諸価値、感情的な反応を確実にする時たよりにされるシンボル、その下でミドルタウンが行進する旗印⁽³³⁾」。

この「精神」は「(社会的に) 生き残るためには同調しなければならない」支配力を持つのだが、なぜそうなのかを見ていく前に、この議論に関連ししかも『変遷するミドルタウン』解釈の「定説」となっている見解を検討しておかなければならない。

「定説」によれば、『変遷するミドルタウン』はコミュニティの「階級」と「権

力」をテーマにしている、という。リンドがミドルタウンの「上層階級」である地域資本家「Xファミリー」分析を行なったというのがその理由である。このことは、言わゆるコミュニティ権力構造論（CPS）の中で注目され、次のような評価をうんでいる。

「……リンド夫妻は、地域社会内で一定の位置を占めている人びとがかれらの平等性をより確かに保証するため、強力な団体団表権⁽³⁵⁾を含む広範囲にわたる資源をいかに自由に処分しているかを示してくれた」。

すなわち、社会構造上の権力の機能にリンドが注目した、との指摘である。『変遷するミドルタウン』が書かれたアメリカの'30年代、すなわち「赤い10年」の類推がここに不用意に重ねられ、リンドの「ゆるやかなマルキスト、ポピュリストの姿勢」⁽³⁶⁾さえ指摘されるのだが、しかしこうした解釈は早計だろう。

確かにリンドは「Xファミリー」の圧倒的な経済力、そしてそれゆえの人々の生活に対する具体的影響力を描いている。けれども、消費者問題研究の主眼が人々が持つ「よい暮らし」のイメージにあったように、ここでも関心は「Xファミリー」に対する人々の認識にこそ置かれている。リンドは、ミドルタウンの誰もが「Xファミリー」を言わゆる「権力者」と見ていないことを指摘する。彼らは敵対どころか尊敬の対象である。なぜか。

「彼らの控えめな態度と個人的な正直さが貧困から巨万の富へという出世⁽³⁷⁾の経歴」と結びつき、完全にアメリカの成功物語と合致する」。

つまり、「Xファミリー」とは、人々ができれば自分もそうありたいと思っている理想的な「意味」の体现者にほかならない。したがって、人々の注目は「Xファミリー」が行使するさまざまな権力の実際にはではなく、彼らが持つシンボリックな魅力に向けられるのである。このことを確認し、「ミドルタウン精神」の支配力の問題にもどろう。

なぜ「精神」への「同調」が必要なのか。リンドは二重のメカニズムを設定している。ひとつは、今「Xファミリー」分析で見たようなイデオロギー性である。「Xファミリー」を理想視すれば、それだけ彼らの実像は後景に退く。そうした理想視の背景にある論理——「ミドルタウン精神」が「支持」する諸価値は人を成功へと導く⁽³⁸⁾のだから、現実の成功者、すなわち「Xファミリー」はそれら諸価値の体现者にちがいない——、「理念と実在の混同」とリンドが呼んだこの論理こそ、人々から「ミドルタウン精神」を批判する契機をうばってい

く。

もうひとつは「精神」の構造そのものに関わっている。「支持」と「拒否」以外に選択肢がない。「支持」でなければ「拒否」のレッテルが貼られる。たとえば、ミドルタウンの「進歩」や「発展」に疑問を持つ者は、たとえ恐慌下であっても「ラディカリスト」と言われかねない。リンドはニュー・ディール政策がいかにこの種の反発に妨げられたかを描いている。事実、公的扶助がなければ生活ができない状態に追い込まれても、人々の心の底には「扶助」なる「非アメリカ的」やり方に対する嫌悪が消えなかったという。現実の合理的解決のためにニュー・ディールを客観的に検討するのではなく、「精神」にしたがって「拒否」してしまう。リンドは言う。

「……人間的、制度的諸資源（ニュー・ディールを指す）は文化の中で機能する。⁽³⁹⁾しかも文化は長い間の習慣によってパターン化している」。

イデオロギー性と厳格な「支持」あるいは「拒否」の二者択一をもって、「ミドルタウン精神」は「同調」を要求し、人々のパーソナリティはそれに見合った人間像から逸脱することはない。

「こうした習慣的受容と拒否のパターンの周囲に、あるタイプのパーソナリティ⁽⁴⁰⁾が発達する」。

「小都市において認められ、まっとうとみなされる信仰や思想を体現する人物で、穏当かつ中庸を好む。……⁽⁴¹⁾実際ので積極的な人間で気やすく、まったくわれわれのうちの一人といった人間」こそがミドルタウン住民の平均像であるとともに「生き残るため」のタイプでもある。

「ビジネス中心文化」の中で人々が「自分自身の価値」にめざめることを求めて宗教を志したリンドは、ここにいたって容易には相対化できない文化という「鉄のおり」をとらえることとなった。『変遷するミドルタウン』の中で彼は「ミドルタウン精神」にとらわれない個性的な人間像——「逸脱タイプ」⁽⁴²⁾——の存在に気づき、ニュー・ディールの労働政策がそれまで「拒否」⁽⁴³⁾にあってきた労働組合を少しずつ根づかせていることにも目を向けている。後年イギリス労働党をモデルにした「労働者の政党」⁽⁴⁴⁾を許しているところから考えても、そこにある種の「対抗文化」の芽ばえを見ていたのかもしれない。しかし、それらの展開は冒頭に記した（VI）期、デモクラシー論・権力論との関係で考察されるべきだろう。今後の課題とし、本稿の出発点、社会調査家リンドにもど

ってしめくくっておこう。

五 むすびに代えて

ここまでの内容をふりかえると、調査家というより、むしろ「理論家」リンドが浮かびあがってくるのかもしれない。しかし、そう見てしまう時の私達の社会調査家イメージこそ問い直すべきではないだろうか。彼が意外にも理論的に思えるとしたら、その前提にデータ収集と調査技法を中心とした調査家イメージがあるにちがいないからである。

リンドが常に現実と向き合い、特に人々の生活と意識に沈潜してリアリティあふれるデータを得ながら、そこでの問題点を時々の理論を摂取し分析し続けたことを忘れてはならないだろう。調査家が意外にも理論的提起をした、というのではなく、現実と対面し続けた調査経験があるからこそ可能だった新鮮な問題提示があったことを読み取らねばならない。

リンドは『何のための知識か』の中で、現実から超越しひたすら真理を探究する「学者」と、時計の秒針に追われながら目前の課題処理以外に目がいかない「実務家」各々の弊害を指摘している。考えてみれば、リンドの場合に限らず、理論家＝「学者」、調査家＝「実務家」と考えられていたのかもしれない。現実の中からインパクトのある主張を理論的作業に持ち込み、理論的作業を経て豊かな現実認識を獲得していくこと——困難な相互作用だが、リンドの足跡はそのことの苦闘を示してくれたと言えよう。本稿はそうした困難な課題を見すえつつ、そこにいたる始点として、おぼろげなリンド像を示したものにすぎない。

(注)

- (1) P・F・ラザーズフェルドは「社会調査史の注目点として、①調査アイディアや方法の固有の発展、②調査を促進あるいは阻害した社会的ネットワーク、③背景となる文化的歴史的要因、の3点を挙げている。P.F. Lazarsfeld, "Foreward" in A. Obenschall(ed.), *The Establishment of Empirical Sociology*, Harper & Row., 1972. 尚、日本での社会調査史の動向については、後藤隆、「社会調査史の視点」、『一橋研究』十巻一号、1985。
- (2) C. Bell & H. Newby, *Community Studies*, Praegen Pr., 1972, pp. 82—83.
- (3) 福武直、松原治郎、『社会調査法』、有斐閣、1967, p. 81。; 井垣章二『社会調査入門』、ミネルヴァ書房、1978, p. 58。

- (4) R.S. & H.M. Lynd, *Middletown A Study in Modern American Culture (M)*, Harcourt, Brace & Jovanovich, 1929, p. 6.
- (5) *Special Issue Robert S. Lynd, The Journal of the History of Sociology (JHS)*, vol. II, no. 1, Fall-winter '79-'80. これは '79年3月に行なわれた The East Coast Conference of Socialist Sociologists でのリンドに関するシンポジウムを基にしている。
- (6) C.H. Page, *Class and American Sociology*, Octagon Books Inc., 1964, p.252.; M.R. Stein, *The Eclipse of Community*, Princeton Univ. Pr., 1966, p. 69.; 石川淳志「階級・階層構造論」(岩井弘融編『都市社会学』, 有斐閣, 1968, p. 63); 布施鉄治「ヤンキーシティとミドルタウン」(塩原勉他編『社会学の基礎知識』, 有斐閣, 1969, p. 207); J. バーナード, 正岡寛司訳『コミュニティ論批判』, 早稲田大学出版部, 1978, pp. 97—98; N.W. ボルスビー, 秋元律郎訳『コミュニティの権力と政治』, 早稲田大学出版部, 1981, pp. 18—29.
- (7) 宇津栄祐「現代社会学の史的展開をめぐるいくつかの理論的諸問題」, 『中央大学文学部哲学科紀要』, 1981年3月号, pp. 43—46.
- (8) R.S. Lynd, *Knowledge for What? The Place of Social Science in American Culture(KW)*, Princeton Univ. Pr., 1939, p. 25.
- (9) R.S. Lynd, “The Science of Inhuman Relations”, *New Republic*, no. 121, 1949.
- (10) R.S. Lynd, “Planned Social Solidarity in the Soviet Union”, *AJS*, no. 51, 1945.
- (11) 梶原景昭「シュッツ ミドルタウンの解説」, 『現代思想』10巻10号, 1982, pp. 122—125.
- (12) フランクフルト社会研究所, 山本鎮雄訳『現代社会学の諸相』, 恒星社厚生閣, 1983, pp. 154—157.
- (13) R.Lynd, “Robert S. Lynd : The Elk Basin Experience”, *JHS*, p. 14.
- (14) C.H. ホプキンズ, 宇賀博訳『社会福音運動の研究』, 恒星社厚生閣, 1979, p. 285.
- (15) *Lynd Papers Microfilm Edition(LP)*, Library of Congress, 1981.
- (16) R. S. Lynd, “Crude-Oil Religion”, *Harpers' Magazine*, 1922, p. 429.
- (17) *ibid.*, p. 434.
- (18) 谷口忠顕『デューイの人間論』, 九州大学出版会, 1982, pp. 7—20.
- (19) R.S. Lynd, “Has Preaching a Function in Adult Re-Education?”, in *LP*.
- (20) *M*, p. 6.
- (21) この指摘は, R.H. Pells, *Radical Visions and American Dreams*, Harper & Row., 1973, pp. 22—25. 又, リンドの文化滞滯論は, R.S. Lynd, “Manhattan Boom-Town”, *Survey Graphic*, no. 68, 1932 に顕著である。
- (22) *M*, p. 35.
- (23) *M*, p. 498.
- (24) *M*, pp. 501—502.

- (25) M.C. Smith, "Robert Lynd and Consumerism in the '30's" *JHS*, p. 99.
- (26) R.S. Lynd, "Family Members as Consumers", *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, no.160, 1932, p. 90.
- (27) Smith, p. 100.
- (28) R.S. Lynd, "The People as Consumers", in President's Research Committee on Social Trends(ed.), *Recent Social Trends*, McGraw-Hill Book, 1933, pp. 868—869.
- (29) Lynd "Family Members as Consumers", p. 87.
- (30) *ibid*, p. 92.
- (31) T. Veblen, *The Vested Interests and the Common Man*. George Allen & Unwin, 1919, p. 9. 又、これについては、基本的に内藤昭『ヴェブレンの思想構造』, 新評評, 1985 に依拠している。
- (32) R.S. & H.M. Lynd, *Middletown in Transition A Study in Cultural Conflict (MIT)*, Harcourt, Brace & Company, 1937, p. 402.
- (33) *MIT*, p. 403.
- (34) *MIT*, p. 25.
- (35) バーナード, p. 97.
- (36) E. Shils, *The Calling of Sociology*, Univ. of Chicago Pr., 1980, p.376.
- (37) *MIT*, p. 76.
- (38) *MIT*, p. 422.
- (39) *MIT*, p. 123.
- (40) *MIT*, p. 402.
- (41) 梶原, p. 125.
- (42) *MIT*, p. 402.
- (43) *MIT*, p. 29—34.
- (44) R. Lynd in *JHS*, p. 21.
- (45) *KW*, pp. 1—2.